企画展「大政奉還一五〇年　小松帯刀とその時代」展示資料に関する調査報告

市村哲二

はじめに

小松帯刀（天保六（一八三五）年から明治三（一八七〇）年）は、よく知られているように、幕末期の薩摩藩における家老の中心的存在として活躍した人物である。「国父」として藩の実権を握った島津久光の信頼の下、海軍を充実させるなどの強藩づくりを推進し、また、中央政局においては、薩長同盟の締結から大政奉還に至るまでの一連の動きに、藩を代表して深く関わり続けた。明治維新による新政府成立後も参予や外国官副知事などの要職に就きながら、一方で、病のために若くして亡くなったことから、西郷隆盛や大久保利通に比べると、その知名度や歴史的評価は、これまで十分に高かったとは言えない面がある。今回、本年（平成二十九（二〇一七）年）が大政奉還からちょうど一五〇年を迎える年であることから、従来、あまり評価されてこなかった大政奉還時における帯刀の功績を顕彰する意味で、表題の企画展を開催した。展示資料は主に帯刀が藩の家老となり、藩政に深く関わることとなった文久二（一八六二）年から、帯刀が亡くなる明治三年までの時期を中心に、政局の中で帯刀が果たした重要な役割や功績に関わるものとした。

本稿では、特に展示資料の中でも帯刀と大政奉還前後の動向との関わりが窺える資料を十点、取り上げた。そして、それらの資料を通して、大政奉還の実現に当たり、帯刀と、その周囲の人物たちがどのように関わったか、また、大政奉還が当時の中央政局に及ぼした影響や歴史的意義などについて、先行研究を基にしながら、企画展終了後も整理した内容を含めて、若干の考察を加えることとした。

なお、紹介する資料については、部分的に引用しながら、それぞれの資料の後に当時の政治状況並びに薩摩藩と帯刀の動向などの説明と、関連資料や筆者の私見などを付け加えた。資料名については、展示の際のキャプションと同一のものとしている。

一　元治期・慶応期前半における小松帯刀と薩摩藩の主な動向

元治元（一八六四）年の第一次長州征討に引き続き、再征を進めようとしていた幕府に対し、薩摩藩（帯刀）は、長州藩が長崎で銃器を購入するための便宜を図るなど、徐々に長州藩に接近する動きをとり始めた。

その結果、慶応二（一八六六）年一月、京都において薩長両藩は同盟を締結することとなる。第一次征討で禁門の変に関する謝罪は済んだものとし、戦争も辞せずとしていた長州藩の木戸孝允の強硬論を受け入れ、同盟の締結を最終的に決断したのは、おそらく島津久光の信任が厚く、京都における最高責任者であった帯刀ではないかと考えられる。(1)

その後、慶応二年六月に幕長戦争が勃発し、戦況が長州藩有利に進む中、十四代将軍徳川家茂が病死し、徳川慶喜が十五代将軍に就任する。

慶喜は、当時の懸案であった長州処分と兵庫開港問題を協議するために朝廷に大名の上京を願い出て、その結果、慶応三（一八六七）年五月に慶喜と久光らとの間でいわゆる四侯会議が開かれた。

しかし、慶喜と四侯の間で意見が対立したことで会議は失敗に終わり、以後、薩摩藩内では、幕府に対して西郷や大久保らが強硬姿勢をとり始めていく。その一方で帯刀は、武力を威力として用いながら、大政奉還、王政復古を実現させていく方法を模索していったと推測される。

これらの経緯について、まずは薩摩藩と土佐藩が結びつきを強めることになる慶応三（一八六七）年六月以降の政治状況に関わる展示資料から、当時の情勢について概観していくことにしたい。

二　慶応三年六月以降の薩土両藩の関係に関わる展示資料

【展示資料一】

「薩土盟約趣意書　慶応三年六月付」[2]

慶応三年六月中旬、長崎から上京した土佐藩士後藤象二郎と坂本龍馬らは、慶喜に大政奉還を働きかける案を薩摩藩に持ちかけた。本資料は、薩土両藩の代表者による会議で締結された盟約の約定書である。

この中で、特に留意すべき部分は以下の箇所である。

（前略）

国ニ二王ナシ、家ニ二主ナシ、政権一君ニ帰ス、是其大条理、我皇家綿々一系、万古不易、然ニ古郡県ノ政変シテ今封建ノ体ト成ル、大政遂ニ幕府ニ帰ス、上皇帝在ヲ不知、是ヲ地球上ニ考スルニ、其国体制度如茲者アラン欤、然則制度一新、政権朝ニ帰シ、諸侯会議、人民共和、然後庶幾以万国ニ臨テ不恥、是ヲ以テ初テ我皇国ノ国体特立スル者ト云ヘシ、

（中略）

一天下ノ大政ヲ議定スル全権ハ朝廷ニ在リ、我皇国之制度・法則、一切之万機、京師之議事堂ヨリ出ヲ要ス、

一議事院ヲ建立スルハ、宜ク諸藩ヨリ其入費ヲ貢献スヘシ、

一議事院上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至マテ、正義純粋ノ者ヲ選挙シ、尚且諸侯モ自ラ其職掌ニ因テ上院ノ任ニ充ツ、

一将軍職ヲ以テ天下ノ万機ヲ掌握スルノ理ナシ、自今宜其職ヲ辞シテ、諸侯ノ列ニ帰順シ、政権ヲ朝廷ニ帰ス可キハ勿論ナリ、

一各港外国ノ条約ハ兵庫港ニ於テ新ニ朝廷ノ大臣・諸侯ノ士夫ト衆合シ、道理明白ニ新約定ヲ立テ、誠実ノ商法ヲ行フベシ、

（後略）

盟約の主旨は、将軍慶喜に政権を朝廷に奉還させ、その後、朝廷が中心となって公議機関（議事堂、議事院）を設立し、中央集権国家の体制を確立することとし、将軍は辞職して諸侯の列に帰順するというものである。これを実現するための方策は明記されていないが、政権を平和的に交代させ、日本を内乱の危機から救うべく提案されたものであることは明白であった。おそらく、対幕強硬派の西郷や大久保としては、この

ような建白をしたとしても慶喜が受け入れるはずもないだろうから、それを大義名分として挙兵をし、土佐藩も味方に引き込む算段があったものと考えられる。[3]

この後、この約定書に久光も目を通すことになるが、この点が薩長同盟との大きな相違点である。[4] 久光は、慶喜に将軍職の辞退を求める建白書の提出に対し、「此策断然相行れ候得は、実ニ皇国挽回之基本とも相成可申哉」との感想を付けて、国元の藩主島津忠義に書き送っている。[5] この文面から見ると、久光はこの案に対し、率直に賛意を示している様子が窺える。しかし、一方では、盟友の伊達宗城に対して同時期に「此頃象次郎如立論処置ハ甚不宜と独見ニハ存候」との感想を伝えている。[6] これを見ると、久光の真意は、封建制を否定しかねない王政復古につながる大政奉還には同意できないというところにあったとも受け止められる。ただ、後日、大政奉還が実現された際に、帯刀が国元で久光・忠義親子に報告した時の様子を、「御案外之事ニテ、別テ御大悦ニ御座候」と後藤に書簡[7]を送っていることなどから、久光は大政奉還の論自体には否定的ではなかったように思われる。おそらく、宗城が同年六月二十四日の日記に「象次郎主張スル論モ人望ニ関係と察申候」[8]と記しているように、やや先走りが見られる後藤個人に対する不信感や、山内容堂が採用するかどうかが不明であった[9]ために、先に挙げたような感想を久光が宗城に漏らしたのではないだろうか。

そして、着目すべきは、後藤が薩摩藩代表者に対して大政奉還論を説明した時、最もそれに同意を表明したのは帯刀であったと、後年、回想している点である。[10] 対幕強硬派の西郷[11]や大久保らとは違い、帯刀はすでにこの時点から、大政奉還の実現（あくまでも平和裏に政権交代を行う）を現実的な政局打開の手段として強く意識し始めた可能性があるように推察される。また、「内乱回避」を重視する久光の意向に沿った方向性を模索していた帯刀にとっては、おそらく最善の方策として捉えられたものと考えられる。

【展示資料二】

「寺村左膳外二名　土佐藩士連署建言書　慶応三年九月付[12]」

本資料は、土佐に帰国中の山内容堂に代わり、土佐藩士の寺村左膳、後藤象二郎、福岡藤次らが作成した建白書の写しと思われるものであり、天下の大政を議定するのは朝廷であることなどを述べている。以下、その主な内容が記された箇所を記載する。

（前略）

一天下ノ大政ヲ議定スルノ全権ハ朝廷ニアリ、則我皇国ノ制度・法則・一切ノ万機、必京師ノ議政所ヨリ出ルヲ要ス　議政所ヲ建立スルハ、宜ク、諸藩ヨリ其費ヲ貢献スヘシ

一議政所上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ル迄、正義純粋ノ士ヲ撰挙シ、諸侯モ自ラ其職掌ニヨリ上院ノ任ニ充ツヘシ、

一京摂其外都会ノ地ヲ撰ミ、大小ノ学校ヲ設ケ、長幼ノ序ヲ分チ皇国ノ学術及ヒ外国ノ学業モ其人々ノ旨趣・才能ニ従フテ教導スヘシ、

一各港外国ノ条約ハ、兵庫港ニ於テ新タニ朝廷ノ大臣・諸藩ト衆合シ、道理明白ニ新条約ヲ結ヒ、誠実ノ商法ヲ行ヒ、信ヲ外国ニ失ハサルヲ以テ要トス、

（後略）

内容は、先に記載した「薩土盟約趣意書」の主旨とほぼ共通した面が見られるが、薩土盟約にあった「将軍辞職」の項目が削除されており、代わりに、教育の普及に関する項目が加えられている。そして、薩摩側の同意を取り付けた上で、同年十月三日に土佐藩から幕府に提出された建白書の内容もほぼ同様である。盟約の内容から「将軍辞職」の項目が削除されたのは、対幕強硬派に反対する姿勢をとる山内容堂の意向であると思われる。さらに、土佐藩は盟約締結時に約束した兵力も準備できなかったことから、同年九月九日、帯刀・西郷・大久保らは土佐側に対し、盟約の破棄を告げ、薩土両藩は互いに別々の路線を歩むこととなった。一方で、この時期以降土佐側は、帯刀と対幕強硬派の西郷や大久保を区別しつつ、武力を威力として用いる奉還に向けて、帯刀への働きかけを強め、帯刀もその方向性を探っていったのではないかとも考えられる。その背景としては、「寺村左膳手記」[13]の記述が参考になる。寺村の手記によると、同年九月十一日頃に、帯刀が大坂にいた久光のもとに伺い、土佐側との会談の内容を報告するとの情報を土佐側に漏らしていることがわかる。そして、実際に帯刀は大坂に向かい、久光が九月十五日に大坂を離れて鹿児島へと向かった翌日に京都に戻っている。この時に帯刀が久光に対して具体的にどのような報告をしたのかは明らかでないが、久光が言い残した事については、九月十八日頃、帯刀が土佐側に語っていることから、次の内容であることがわかる。[14]

（島津珍彦）

京師之時情之義ハ備後公子竝ニ重臣へ御委任ニ而御出帆被成候

このことから、久光は、帯刀らの薩藩在京指導部にほぼ全面的に委任をした形で帰国しており、実質的な最高責任者である帯刀にかかる精神的な負担が一層重くなったであろうことが推察される。[15]と同時に、このような情報を帯刀が土佐側に逐一、伝えていくことで、今後も自分が薩藩在京指導部の最高責任者として、土佐側と連絡を継続していきたいという意志表示を帯刀がしていたとも見てとることができないだろうか。そして、土佐側にとっても、大政奉還論に最も同意を表明した帯刀とのパイプを特に重要視していたと考えるのは自然な見方であると思われる。実際に、以後も帯刀と土佐側の連絡は継続されており、両者の関係は大政奉還時においても、密に続けられていくこととなる。

一方、帯刀が土佐藩とのパイプを継続する中で、薩摩藩は、長州藩、安芸藩と出兵協定を締結し、幕府に対する軍事的圧力を増していく動きもとっていく。この点について、慶応三年六月以降の対幕強硬派の動向に関する展示資料から、引き続き考察していくことにしたい。

三　慶応三年六月以降の対幕強硬派の動向に関わる展示資料

【展示資料三】

「在坂重役宛　大久保利通書状　慶応三年六月付」[16]

大久保ら対幕強硬派は、慶応三年六月、在坂の重役に、軍艦をもって

一大隊の兵士を京都に派遣するように要請した。幕府（徳川慶喜）に対して、軍事的圧力をかけるねらいがあったものと思われるが、以下、関連する箇所について抜粋し、記載する。

（前略）

大守様御出馬被　仰出置候得は、此度は自ら御上京可被為　在事候得共、一先軍艦三艘を以一大隊之兵士被差出、右帰帆之上、直ニ御乗船御上京之御用意ニ被為　遊度、決而神速御上京ならてハ不為済段、衆論も相起可申候得共、篤と御熟考ニ被為及候上、兎角一大隊人数、往復之后ならてハ御秘籌ニも相違し、事之成否ニも関係いたし候故、分而被仰進候間、呉々御趣意無御汲取違、十分御統御被為在、往復次第堂々御出馬被為　在候様有御座度奉願候、

（後略）

四侯会議の崩壊により、自分たちの考えが通らない事を痛感した西郷や大久保らの薩摩藩内の反幕派は、幕府に対してより一層の強硬的な姿勢をとる方向へと舵をきっていく。また、久光は、当時、情報収集を目的として薩摩藩邸に潜んでいた長州藩士の山県有朋と品川弥二郎に対し、同年六月十六日に近日、西郷を山口に派遣することを告げた上で、六連発の銃を与えた。その後、山県、品川の両名は帯刀邸で西郷・大久保・伊地知正治と会談するが、薩摩側が「朝廷御守衛を専一に致し天勅を奏請し幕府年来の罪逆を正」すとの返答をしていることから、おそらく軍事的圧力をかけつつ、朝廷から将軍慶喜排除（辞職）の勅を引き出そうとする意図を伝えたのであろう。[17] すでに、薩摩藩は同年五月二十九日、帯刀が藩邸御座の間に在京幹部（西郷、大久保の他、大目付の関山糺、側役の田尻務、蓑田伝兵衛、吉井友実、留守居の内田政風、新納嘉藤二ら）を招集し、長州藩と共に事を挙げることをほぼ決定していた。ゆえに、先述した会談は、薩摩藩内の協議の結果の延長線上で行われたものであると考えられる。

資料の内容を見ていくと、まず、太守（藩主の島津茂久（忠義））の上洛の前に、まず軍艦三艘をもって一大隊の兵士を上洛させてほしいと要請している。後略の部分に、「島津備後（忠鑑）殿　一大隊兵士惣督被仰付度」とあるので、引率を島津備後（久光三男）に依頼していることがわかる。そして、国元では様々な意見も出るだろうが、よくよく熟考された上で、一大隊の兵士を送った軍艦が戻り次第、忠義に堂々と上洛してほしいと伝えている。久光も同年六月十八日付の忠義宛書状[18]の中で、忠義自身はとりあえず上洛しないようにと書き送っていることから、この方針が薩藩在京指導部の総意であったと見ることができるであろう。

ここで着目したいのが、忠義の上洛（＝率兵上京）について国元ではどのような意見が出ていたかという点である。この時期の薩摩藩内における出兵に反対する意見の高まりについては、近年、色々と論じられるようになっているが[19]、その事に関連して、国元からの出兵について帯刀が関わった資料を次に紹介したい。

【展示資料四】

「小松帯刀宛　桂久武書状　慶応三年七月二十九日付[20]」

本資料は、藩内の諸郷からの出兵人数について、国元のまとめ役的な

役割を果たしていた家老の桂久武が、薩藩在京指導部の最高責任者であった帯刀に相談している書状である。以下、その内容に関連する箇所を記載する。

（前略）

一 諸郷私領出兵之人数も、都之城一隊之外ハ惣而新兵、俄練習ニ而如何と存居候処、一統此度ハ十分之はまりニ而先可成ニ出来候而仕合ニ御座候、一昨日御城下六番隊并ニ新兵二隊、番兵二隊、諸郷・私領一大隊之調練有之、上様ニも御出被成、随分出来上り申候、就而ハ当月九日諸郷私領共一統出揃ニ相成、毎日精々之調練ニ御座候処、最早随分出来候付、御地之御模様延曳ニも罷成候ハヽ、一応帰郷被仰付候而ハ如何御座候半哉、其郷々ニ而弥練習いたし候ハヽ、急速出兵被仰付候而も、船仕舞かた〳〵いたし候内ニハ、随分間ニ合候半欤とも存申候、何分ニも御模様次第之事ニ而、爰許ニ而ハ、難決御座候間、兼而御含置被下度御願申上候

一 海軍方之儀ハ兼而申上置候通、何も行届兼候儀而已ニ御座候処、此節徳間彦二罷下り精々致尽力、兵隊も振興申事ニ御座候、既昨日於調練空発調練致見分候処、撰残候人数ニハ御座候得共、陸軍方調練よりハ能く相調居申候、

（後略）

傍線部を読み解いていくと、桂は、諸郷からの郷士たちや海軍方の兵士の士気が振興している様子を帯刀に伝え、出兵の要請にも対応できそうな状況であることをそれとなく示唆していることがわかる。実際、この時期に、かつて文武不出精・風俗頽廃と指摘されていた郷士たちは、一変して地頭のもとで士気振興・一致一和を果たして文武・調練に励んでいた[21]。しかし、その一方で、この書状が出された月の当初には、出兵に対して早くも国元で薩藩在京指導部に対する不信感がわきおこっている様子が、記載されている史料がある[22]。このような状況の中で、同年八月十四日、これまでの薩摩藩の尽力への謝意を伝える久光宛毛利敬親・広封藩主親子の礼状を持参して上洛した長州藩の使者（柏村数馬と御堀耕助）に西郷が語ったと言われるのが、「三都一時事を挙げ候策略」（対幕挙兵計画）であった[23]。しかし、この計画は相当にずさんなものであり、久光はこの計画を知らされていなかった可能性がある、とする見方[24]があるが、おそらくそれが妥当な見解であるように思われる。そもそも、文久期以来、常に内乱防止を考えてきた久光がそのような危険な計画に承諾を与えるはずがなく、久光のスタンスとしては先述したように長州藩との連携により、あくまでも幕府に対して軍事的圧力をかけつつ、朝廷に改革を迫るところまでであったと考える。

それでは、このような久光の意向に対し、帯刀はどのように応じていったかであるが、おそらく久光の意向を汲みつつも、西郷や大久保との関係を決裂させない方向で動いていたのが実情ではなかろうか。この点に関して、次の史料も参考にしながら、検討していくことにしたい。

【展示資料五】

「田尻務・蓑田伝兵衛宛　大久保利通書状　慶応三年九月十六日付[25]」

体調不良の久光が帰国のため、大坂を出帆した日と同日の九月十五日、

大久保は長州藩の伊藤俊輔（博文）と品川弥二郎の両名を伴って大坂を出港し、山口へ赴いた。そして、九月十八日に毛利藩主親子と会見した後、木戸孝允や広沢真臣らとの間で出兵問題が話し合われ、翌十九日に薩長両藩の間に出兵協定が結ばれる（さらに、安芸藩も参加）。本書状は、大久保が山口に赴く際に、船中で書かれたものと思われる。以下、着目すべき箇所を記載する。

（前略）

一 於浪花御評議相成候条々、尚亦於船中黒田抔談合仕候処、小生長江差入談判之上、十分同意、京地切迫之事情汲受、此上ハ片時早目揚旗候処、急務ニ就、彼方速ニ人数出張ニ及候半と之都合ニ候ハヽ、御国人数待合之事ハ、強而不申入方可然、如何んとなれハ御解纜后、又模様一変いたし候も難図、一日を延し候得ハ、一日之害を増候時宜御座候故、片時も早目決挙ニ及候処ヲ主とする之趣意ニ御座候、乍去夫ハ先方模様次第之事ニ而、彼是当月中を限り候場合ニ可相成、左候得ハ御国人数之処も宜鋪時分ニ打合可申と被考申候、何分ニも

（直太郎）

早々御繰出被下候処肝要と被存候間、黒田・堀なと種々及談論候付、御聞取之上宜鋪御尽力奉頼候、三田尻江出懸ケ候上之都合旁引合も可有之、若機ニ後れ候節ハ、与程之難事と被存、成程惣差引之任ハ

（綱良）

御談ニも相成居事候へとも、大山格之助一応博多迄報知之上直様入長、三田尻江差越、御国人数待受候都合ニ談置申候、左候得ハ仮令長兵出張跡ニもせよ、都合よろしく候半ト相考申候、

（後略）

まず、この書状が出される前の同年八月段階の状況から見ていくと、先述した西郷らの挙兵論に対し、京都薩摩藩邸内及び国元において、反対意見が強まり、出兵が困難な状況となっていたことが考えられる。例えば京都藩邸内では、大目付の関山糺が帯刀と大議論を展開したと伝わっており[26]、さらに国元では、久光の次男であり、宮之城領主の島津図書久治が出兵に慎重な立場をとっていた。そのような中で、体調が悪化した久光が帰国したことで、小松・西郷・大久保らが実質的に薩摩藩を代表して京都の中央政局にこれまで以上に深く関与していくことになっていく。本書状の内容を見ていくと、まず長州藩に対して、幕府から支藩主及び本藩家老等の上坂命令が出されていたことを理由とすることで、長州藩が京坂地域に一日でも早く出兵することを求めている。さらに、同年九月中に薩摩藩兵を乗せた軍艦が長州藩の軍港である三田尻に到着後、薩長両藩の兵が合同して京坂地域に出兵することなどが定められていることがわかる。しかし、その後、薩摩藩内において出兵に反対する建白が相次いで提出されたことなどから、久光が忠義との連名で「御書取」を発して事態を鎮めたものの、約束通りに軍艦を派遣できなかったために、長州藩は同年十月三日に出兵方針を取り消すこととなった。さらに、安芸藩でも家老の辻将曹が西郷に対し、土佐藩の大政奉還建白書に同意して尽力することや、「討幕等の儀は存じ掛けもこれ無く」といったような内容の事を告げており、西郷、大久保らの対幕強硬派は、厳しい立場に立たされていた。

そこで、帯刀がこの時期にどのような立ち位置にいたかを考える上で、

興味深いのが、桂久武が同年八月十二日付で帯刀宛に出したとされる書状である。[27]【展示資料四】で紹介したように、国元で出兵準備を進めていた桂であるが、帯刀に次のような内容の書状を書き送っている。

（前略）

一 爰許更ニ相変儀モ無御座候、御安意可被下候、

一 御地モ更ニ相変儀モ無御座候由、先平穏之形ニテ仕合ニ御座候、長防御所置抔モ全ク其儘被召置候由、甚残念千萬ニ御座候、只今形ニテハタトヒ京地ハ何モ差置、長防士民ノ情何様ノ挙動モ難計此末ノ処、別テ不容易場合ニモ可罷成哉、上下彼是御苦心ノ程奉推計候、可成ハ　皇国ノ為干戈ニ不及、一新ノ御処置有之レカシト掛而奉祈候、一戦ハ難クシテ易ク後ノ御所置ニオキテ甚六ケ敷儀ト深ク心痛仕候、扨土州之後藤報告モ未無之由、如何之模様ニ御座候半、六ケ敷儀ト存申候、佐賀辺ハ未タ何ノ手モ出不申由、適々出掛而之処、引込モ出来兼可申例ノコビリニテ相済可申哉、笑止千萬ノモノニ御座候、

（後略）

この書状で桂は、国元及び京都の状況を「更ニ相変儀モ無御座候」と述べているが、帯刀が当時の国元における逼迫した状況について知らないはずがなく、[28]これらの文言からは、国元をまとめる立場であった桂の苦悩が感じられる。おそらく、その後に述べている「可成ハ　皇国ノ為干戈ニ不及、一新ノ御処置有之レカシト掛而奉祈候」と、挙兵に慎重であってほしい旨を伝えているところが桂の本音の部分であろう。先述したように、当時、藩は必ずしも一枚岩とは言えない状況となっており、家老の二人は無理な出兵による藩の分裂を防ぐことにかなり苦慮していたと考えられる。さらに桂は、西郷との信頼関係など[29]から相当な心的負担を強いられていた事が推察される。

このような状況の中で、帯刀は大政奉還を推進する土佐藩の平和的な政権交代路線に同調しながら、一方で西郷や大久保ら対幕強硬派とも協調を保ちつつ、「討幕の密勅」の作成にも関わっていき、武力を威力として用いながら、大政奉還、王政復古を実現させていく方法を模索していったのではなかろうか。

その一方で桂は、国元において、軍艦や藩兵の派遣に慎重な意見を抑えつつ、出兵の方向に藩論をまとめていくことになる。その後の帯刀や桂の動向については、引き続き、大政奉還前後の状況に関わる資料から、見ていくことにしたい。

四　慶応三年十月以降の大政奉還前後の状況に関わる展示資料

【展示資料六】

「大久保利通宛　小松帯刀書簡　慶応三年十月十三日付[30]」

慶応三年十月十三日、徳川慶喜が二条城において在京四十藩の重臣に大政奉還を諮問した際に、帯刀は薩摩藩を代表して出席した。本書状はその結果を大久保に報せるものであり、今回の企画展において最も重要視した資料であるため、以下、全文を掲載したい。

只今帰掛罷出候得共、御留主ニ御座候間曳取申候、登営之都合者殊之外之運ニ相成、王政覆古之義十分ニ相立、実ニ意外之事ニ御座候、明日弥奏聞相成ト之事ニ相決申候、早々御咄も申上度候得共、今宵者余程草臥申候間、今宵之処者御免明朝罷出尚御談し申上度義も御座候間、左様御承知可被下候、此旨形行迄　早々如此御座候　以上

十月十三日

大久保一蔵様　小松帯刀

要詞上置

この書状の中で、帯刀は「王政復古の義十分に相立ち実に意外の事」と述べ、王政復古への道筋が予想以上に早く立ったことについて、幕府政治を自ら否定した慶喜の決断に対し、肯定的に評価していることがわかる。また、大久保に対して「今宵は余程くたびれ申し候」と、本音を吐露しているところもなかなか興味深い。帯刀と慶喜との係わりについては、本企画展でも元治元（一八六四）年以降の両者の交わりに関する資料を数点、展示したが[31]、慶応三年のこの時期に至るまで、紆余曲折はあったものの、概して良好であったのではないかと思われる。そして、そのような関係があったればこそ、帯刀は意見を求めた慶喜や老中の板倉勝静らに対し、大政奉還の早期上奏・早期勅許の実現に向けての建言ができたのであろう。また、この文面からは、とにかく早く大久保に状況を説明したいという帯刀の気持ちが伝わってくるが、その背景にあったのは「討幕の密勅」の下付であったと考えられる。密勅は、書状の日付と同じ十三日の夜から十四日の朝にかけて、岩倉具視らから大久保に下付されるが、密勅作成にも関わっていた帯刀にとっては、大政奉還と同時期に下付されることはある程度、予期できたことと推察される。その一方で、大政奉還の実現により、王政復古の道筋が立ったことを確信した帯刀は、少しでも早く強硬派の大久保に伝えるべく、留守中の大久保に「置き手紙」を残したのであろう。このあたりに、対幕強硬派との協調を維持し続けようとする帯刀の姿勢や気配りが垣間見える。続いて、次の資料も参考にしながら、帯刀ら薩藩在京指導部のその後の動向について、追って見ていくことにしたい。

【展示資料七】

「大久保利通宛　小松帯刀書簡　慶応三年十月十五日付[32]」

出兵を前提に、武力を威力として用いようとしたと思われる帯刀の尽力により、慶喜の大政奉還上奏と早期の勅許が実現した。この書状の中で帯刀は、薩藩在京指導部が決定した大政奉還後の当面の方針が土佐藩などにも了解されたことを大久保に伝えている。以下、その全文を紹介する。

（象二郎）

只今後藤も参り、決定之趣相談申候処、同意ト申事ニ而一同にも其処に落着相成候間御安心可被下候、能々御しらせ之趣忝奉存候、大樹公も昼過参　内相成候由御座候間模様も相分可申候間其上は早々可申上候、此旨御報迄早々不備

十五日

一蔵様　　帯刀

続いて、薩藩在京指導部が決定した内容と思われるものを、『大久保利通日記』の慶応三年十月十四日の項[33]から引用し，以下に記載する。

一十四日小大夫登城内府公拝謁尚亦委曲言上有之左之五ケ條を決す
一政権返上之儀早々於朝廷被　聞召候事
一長防御所置御初政ニ　御沙汰之事
一賢侯御召
一征夷将軍職返上之事
一五卿一條
右之外諸藩来会之上萬事御決定被為在候様今日正三卿より秘物降下御受書奉差上候様承知いたし候付

この記載からは、大政奉還勅許の件も含めて，薩藩在京指導部が当面、慶喜に求める方針が、五ケ条にわたって決定されたことが読み取れる。内容は、政権返上の件を早々に奏上して勅許を得る事、長州藩の処置の問題を速やかに解決するべきである事、賢侯を招集する事、慶喜の征夷大将軍職返上の事、五卿の対応問題などについてであるが、これらはまさに「秘物」（討幕の密勅）の降下と同時期に決定されたのである。

帯刀は、先述したように、大政奉還と「討幕の密勅」による武力討幕の動きの双方に関わっていたが、帯刀にとっては大政奉還を受けての諸侯を招集した会議の開催が実現すべき大きな課題であったと思われる。

そして、「討幕の密勅」を効果的に活用することで、藩内の出兵反対派を抑えつつ、武力を威力として用いながら、平和的な無血革命の実現を目指していたのではなかろうか。さらに、その先に見据えていたのは慶喜も含めた新政体の樹立であった、と推測される。坂本龍馬が同年十一月に大政奉還後の政体案として起草した「新政府綱領八策[34]」の中で、「〇〇〇自ラ盟主ト為リ」と書かれた有名な文言があるが、新政体の盟主として龍馬がどの人物を考えていたかは、従来、様々な説が唱えられてきた。本稿において、この件に断を下すことは論拠上、非常に難しいが、帯刀の立場から見ると、慶喜を盟主とした新政体の樹立（＝慶喜を議長とする諸侯会議の開催）が彼の念頭にあったのではないかとも考えられる。もちろん、これは推測の域を出ないが、この点についてもう少し深く考察していくために、さらに他の展示資料なども参考にしてみたい。

【展示資料八】

「桂久武宛　小松帯刀書状　慶応三年十一月七日付[35]」

本資料では、大政奉還実現後に西郷や大久保らと一旦、帰国した帯刀が、国元まとめ役の任に当たる桂に、体調悪化のため上京できない無念さを伝えている内容のものである。以下、ほぼ全文を引用する。

愈御安康御毎勤之筈珍重奉存候、扨御発駕御日限茂被召延候由、未御軍艦も不参如何之御都合ト、早々廻着之処頻ニ相願居申候、小拙も昨

日は上京被仰付難有奉存候、御礼申上候、一昨日粗御内話相願置候通、昨日より内々差越申度含之処、無拠用向も有之、昨日は相調不申今日はか様之天気合ニ而、明早朝より差越精々入湯、成丈御供仕候心得ニ御座候、併昨今之塩梅ニ而は五六日中快方二相成候処無覚束、か様之御時節、病身ニ而は十分之御奉公も出来兼可申と、実々残念之至ニ御座候、併明日より差越精々入湯仕候心得ニ御座候、御多用中海軍所等之義、御頼申上候も誠ニ御気之毒奉存候得共、伺出候義は何卒宜敷御願申上候、新御軍艦兵士乗付之義は、当分四艘之御船ニ被召乗候人数、壱艘ニ十人ツ、都合四拾人御座候間、右之内一艘より五人ツ、引上ケ弐拾人、此節新御軍艦一往来丈被召乗度相考申候、当分翔鳳丸乗組十人之内三人丈欠跡有之由御座候間、右欠跡丈は被仰付候而、四艘より人撰之上引上相成候得は、跡ニ五人ツ、相残賦、此節柄之事二も御座候間、全ク兵士御引取ト申場合ニも参兼候半ト相考申候間、可然御勘考二も御座候ハ、、宜敷御申渡被下度奉頼候、別紙両人翔鳳丸欠跡被仰付度趣承居申候間、前文之都合ニ可相成ト相考、一往来御船乗付之処は可被仰付筋ニ返答いたし度申候間、翔鳳丸三人欠居申候間、右江乗付被仰付候様御取計被下度御頼申上候、新御軍艦船将は、此節一往来丈は松方被命度、外ニ差当いたし方無御座候、其辺旁宜敷御頼申上候、先は此旨御頼旁得貴意候、匆々頓首、

十一月七日

（後略）

書状の後半部分で帯刀は、新軍艦「春日」の乗組員の配分案などを記しており、松方正義を船将とするように伝えるなど、病床にありながらも藩の海軍の総責任者[36]としての責務を果たそうとする姿勢が垣間見える。

帯刀、西郷、大久保の三人は、藩主の島津忠義へ出兵上洛を要請するために「討幕の密勅」を携えて、同年十月十九日に大坂を出発し、途中、山口で毛利藩主親子に拝謁の後、十月二十六日に帰藩して、すぐに久光・忠義親子に京都での状況報告を行った。今回、彼等三人がそろって鹿児島への帰国を決めたのは、おそらく忠義の出兵上洛を求めれば、再度、国論が沸騰すると見ての判断であったと思われる。この時期の動向を『大久保利通日記』[37]から辿っていくと、

（前略）　　（茂久公）

一　廿六日十二字着船直ニ出　殿太守公二丸江御入御　両殿様江小大夫西郷三人一同拝謁逐一言上

一　廿七日於宮之城衆議

（右衛門）

一　廿八日桂大夫小大夫　両君公江拝謁衆議一定之形行言上相成

一　廿九日　太守様御上京御決定来月四日御首途仝八日　御発駕与

被　仰出

（後略）

とある。これらの記載からは、まず、十月二十七日に出兵に慎重な立場の島津図書久治（宮之城）の屋敷で会議（衆議）が行われた上で、翌日、帯刀と桂が久光、忠義親子に拝謁して衆議がまとまったことを言上していることがわかる。そして、同月二十九日には病中の久光に代わり、

藩主忠義の上京が決定することになるが、この決定がスムーズに行われた背景としては、「討幕の密勅」のほか、同月十五日に十万石以上の諸侯に対して上京を命じる朝命が下っていたことなどが想定される。また、二十七日の会議において、これまで藩内の分裂を防ぐことに苦慮してきたと思われる帯刀と桂が強力なタッグを組み、対幕強硬派と出兵反対派との間をうまく周旋できたことも大きかったのではあるまいか。さらに、翌日の言上を聞いた藩主親子（特に久光）が大政奉還について肯定的に受け入れて評価した[38]ことも要因として考えられる。

久光が慶喜の決断を評価したのは、大政奉還によって、内乱や諸外国の干渉を未然に防ぐことができ、天皇の下に、従来の朝廷とは違う中央政府の樹立が可能であると考えたからであろう。そして、将軍職を辞した徳川家と諸藩によって、天皇を補佐していく新しい政体の実現に賛意を示したからだと思われる。そのように見たときに、おそらく帯刀も久光同様、幕府政治を自ら否定できた慶喜を高く評価し、従来の信頼関係などからも、新政体の中心には、やはり慶喜を据えていく方向で考えていたと言えるのではないだろうか[39]。しかし、その一方で、西郷や大久保は、慶喜を新政体から完全に排除すべき方向性を考えていたと思われ[40]、帯刀としては京都を離れる際に後藤象二郎と交わした約束などもあったことから[41]、何としてでも再び京都に上り、政局に関わっていく必要があった。しかし、極度の体調不良（持病の足痛の悪化か）により、国元での静養を余儀なくされたことで、帯刀不在の中央政局は大きなターニングポイントを迎えることとなる。その後の動向について、引き続き、桂が帯刀に宛てた書状などから見ていくことにしたい。

【展示資料九】

「小松帯刀宛　桂久武書状　慶応三年十二月六日付[42]」

慶応三年十一月十三日、藩主忠義は約千名の兵を引き連れて上京したが、前述したように、帯刀は体調悪化のため、鹿児島に残留することとなった。本書状からは、桂が帯刀の身を案じている様子などが読み取れる。その箇所について、該当する部分を以下に引用する。

（前略）

一昨日致帰府、両度之御手翰別紙等慥ニ相達拝掌仕候、時分柄冷々敷御座候処、弥以御壮剛御入湯、先ツ御快方之旨致承知奉大慶候、尚此末無油断御入湯被成度奉祈候、扨小弟儀も御使者済諸所無拠場所柄等江見分相済、罷帰候次第ニ御座候、当方

（中略）

末筆御座候得共、折角無御油断精々御入湯、一日も早目ニ御快気之処幾重ニも奉祈候、先ハ罷帰候形行申上置度、且貴翰之御礼答御容体奉伺度、便船ニまかせ此段荒々申上候、尚追々と申上残候、恐々敬白、

十二月六日　　桂右衛門

小松帯刀様

閣下拝呈

書面からは、帯刀の病状が徐々に快方に向かっていることがわかる。

事実、帯刀は年明けの慶応四（一八六八）年一月十一日に再び上京が命じられ、同月十八日に久光名代として三邦丸で城下一小隊などを引き連れて鹿児島を出発し、同月二十三日に大坂に着き、同月二十五日に京都の二本松薩摩藩邸に入っている。[43] しかし、帯刀が体調不良によって中央政局から離脱している間、薩摩藩内では西郷、大久保らの対幕強硬派が主流となっていったと考えられ、帯刀不在の中、彼等の主導の下で、慶応三年十二月九日に王政復古の政変が決行された。これは、帯刀が目指した、武力を威力として用いる手法の延長線上で行われた政変であり、この時点では、無血革命の実現への道が継続していた。しかし、同月十二日に反撃を主張する幕臣や会津・桑名藩兵を引き連れて大坂に下った慶喜を評価し、新政体に受け入れようとする土佐藩などの動きに越前藩の松平春嶽などが同調したことで、薩摩藩は次第に孤立していくこととなる。幕府側と薩摩藩側の軍事的緊張が高まる中、同月二十八日、江戸の薩摩藩邸が庄内藩によって焼き討ちされたとの報が大坂に伝わり、[44] 幕府側がついに慶応四年一月二日、「討薩の表」を掲げて兵を上京させたことで、鳥羽・伏見戦争が勃発する。このあたりの動向について、次に紹介する資料を通して見ていくことにしたい。

【展示資料十】

「桂久武宛　西郷隆盛書状　慶応四年一月十日付」[45]

慶応四年一月三日、鳥羽・伏見戦争により、新政府軍と旧幕府軍による戊辰戦争が始まった。本資料は、西郷が国元の桂に上方の戦況を伝えている書状である。その一部を抜粋し、以下、掲載する。

尚々、江戸御屋敷を焼崩され、大坂之御屋敷焼失、此両件実ニ残念之仕合、是丈ケか負ニ相成候事ニ御座候、

中将様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ去ル三日徳川暴挙之振舞先月申上置候通ニ御座候、六日迄八幡江押詰無難攻落、橋本迄追詰候処、山崎御固ハ藤堂ニ而御座候処、是も官軍ニ属し共

（枚）

相戦候故、訳もなく責抜追巻り候処、牧方迄も足を止候義不相叶、勿論牧方江出張之兵も共崩いたし、大坂江逃込候処、大坂城中大ニ恐怖を懐、一足もたまり得す薩長之兵今夜押寄も不被計と申事ニて騒立、取る物も取あへす逃支度を成し、七日朝より八日迄に相掛一人も不残大坂城中ハ逃去、越前藩大坂詰之者を召呼、別紙之書面を相渡、早々薩長之先手江写ヲ以相告呉、突撃を免れ度之事而已ニ御座候、三日より六日迄之連戦一歩も不退、少々之敗もなく勝どほし之軍ハ未曽有之戦ニ御座候、為

（後略）

この書状の文面からは、新政府軍の連戦連勝により、高揚している西郷の昂ぶった心情を読み取る事ができる。先述したように、政治的に追い詰められていた西郷らは、鳥羽・伏見戦争における緒戦の勝利によって、まさに息を吹き返し、一躍、政局の主導権を奪回できたのであり、西郷が旧友の桂に得意満面の書状を送ったのは至極当然の成り行きだったと思われる。戦争の経緯の詳細については割愛するが、[46] この時期の帯

刀の動向を『小松帯刀日記』[17]から辿っていくと、同年一月十二日の項に上方の状況について知り得た情報を次のように書き記している。

一 兵庫六日出帆英船上海通船港口迚廻船一人上陸サセ京攝ノ新聞左之通

三日伏見ト大坂トノ間ニ二ノ戦争相開ケ初メ薩兵ト徳川兵ト相戦藝長土三藩應援ニテ官軍大勝利四日迚戦争四日ニ徳川浪花城エ曳取候トノ事

西郷の興奮した文面とは違い、帯刀が冷静に戦況を受け止めて記載している様子が窺える。また、同月十四日の項を見ていくと、

（前略）

一 夜七ツ時分崎陽ヨリ高見彌一報知英軍艦ヨリノ新聞

英軍艦兵庫ヨリ正月十日出帆同十三日八ツ時長崎ニ着ス

一 正月八日戦争大キニ官軍勝利

一 同九日大坂城落城江戸兵壹人モ無之都而打チラシ官軍大坂中惣カタメ相成尤大坂市中不残焼失

一 同十日江戸惣引取相成右英艦長崎懸念相成態々参リ候

一 大君方盡ク敗走薩摩兵士大坂ヲ半ハ焼シ

英商人兵庫英船ヘ乗組ノ義「ミニストル」ヨリ申付候

地名

大君兵士河邊神戸ニ曳去レリ是ハ英居留地故ニ這入レリ

大坂奉行英蒸氣船ニ借役人其外ヲ横濱ニ載去レリ運上所ハ閉チタリ

（後略）

ここでも、努めて戦争の経緯を客観的にまとめているが、同月六日の慶喜の大坂城退去や翌七日の慶喜追討令についてはふれておらず、これらの件に関して、帯刀の胸に去来していたものを窺い知ることは困難である。一方で、同月二十七日、二十八日の項を見ると、

一 廿七日雨足痛ニテ不参十二字武庫滞在岩下家ヨリ一封相達直ニ西郷方エ差廻候事

一 廿八日晴十字二十分出殿

大政官代外國掛ヨリ只今御用有之候得共病氣ニテ今日ノ處者御留守居附役ヲ以申出候事

一 四字四十七分退出

一 新納刑部伊地知壯之丞上京ノ事

一 太政官代ヨリ七ツ時分只今御用有之候得共病氣ニテ御断トシテ御留守居附役赤井直之進被差出候處名代ニテ左之通被仰付候事

薩州

小松　帯刀

可爲徴士参與被仰出候事

正月

三條様ヨリ御渡シ

薩州

小松　帯刀

外國事務掛被仰出候事

正月
宇和島侯ヨリ御達

以上の記述からは、帯刀の足痛が再び悪化し、体調が優れない中で、新政府より徴士・参与（予）で外国事務掛に任じられていることがわかる。また、体調不良で動けない中でも西郷との連絡を怠らない姿勢も読み取ることができる。結果的に、鳥羽・伏見戦争の勃発によって、政局の動向は帯刀が望んでいた方向とは違った途へと進むことになったと思われるが、あくまでもこの時点までは、帯刀は西郷らとの協調を意識しつつ、自身の新政府への参加を意図していたのではあるまいか。しかし、体調が完治しないままで外国事務担当の激務にあたっていった[48]ことは帯刀の寿命を縮め、明治三（一八七〇）年、帯刀は数え年三十六歳の若さで、人生の終焉を迎えることとなった。

おわりに

本稿では、ここまで企画展の展示資料における、小松帯刀と大政奉還前後の動向との関わりなどが窺える資料を取り上げて紹介してきた。そして、これらの資料を通して、大政奉還に至るまでの、帯刀とその周囲の人物たちの動向並びに大政奉還が当時の中央政局に及ぼした影響や歴史的意義について推察されることなどを先行研究を参考にしながら、若干の考察を加えてきた。

大政奉還については、これまで多くの研究者が論文等で触れてきており、様々な研究成果が発表されてきているが、この時期の薩藩在京指導部における最高責任者であった帯刀との関わりを主にして論じられたケースはあまりなかったようである[49]。よって、帯刀の動向を主にしながら、様々な資料を用いつつ、大政奉還から王政復古へと続く当時の政局の動向について更に深く考察していくことは、これからも必要な作業であるように思われる。

また、帯刀の周囲の人物たちの中で、特に国元のまとめ役的な立場であった桂久武や、その他の武力倒幕に反対的な立場であった家老クラスの人々の動向分析についても西郷隆盛、大久保利通らの対幕強硬派に比べ、比較的、不十分だったようにも見受けられる[50]。

そのため、今後は、慶応三（一八六七）年五月の四侯会議崩壊の時期から、同年十二月の王政復古の政変を経て、翌慶応四（一八六八）年一月三日の鳥羽・伏見戦争勃発に至るまでの流れにおいて、帯刀や、先述した家老クラスの人々の動向に詳細な分析を加えていく必要があるように感じている。

そして、慶応期後半の薩摩藩の動向について、更に広い視野で捉えていくことが今後の重要な課題であると考えている。

註

（1）拙稿「企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」展示資料に関する調査報告」（『黎明館調査研究報告第29集』所収　二〇一七年　八十頁）

（2）『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』（鹿児島県　一九九六年）No.一六七三　二一六頁～二一八頁

(3) 高村直助『小松帯刀』（吉川弘文館　二〇一二年）　一七九頁
(4) 前掲「企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」展示資料に関する調査報告」　八十頁
(5) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料補遺　南部弥八郎報告書二』（鹿児島県二〇〇三年）No.四十　七四一～七四二頁
(6) 『伊達宗城在京日記』（東京大学出版会　一九七二年）五四〇頁
(7) 『鹿児島県史料　忠義公史料四』（鹿児島県　一九七七年）No.五五五五二～五二二頁
(8) 前掲『伊達宗城在京日記』　五三九頁
(9) 特に宗城は、容堂が慶応三年六月段階では大政奉還論を採用しないのではないか、と見ていたと考えられる。なお、この点については、下関市立歴史博物館学芸員の田中洋一氏より御示唆をいただき、前掲『伊達宗城在京日記』五三八頁を参考にした。
(10) 家近良樹『徳川慶喜』（吉川弘文館　二〇一四年）　一九九頁　なお、家近氏は、「故伯爵後藤象二郎君談話」『史談会速記録』百七十附録島津家事蹟訪問録より引用したとしている。
(11) ただし、西郷自身も、慶応三年の五月段階で久光に大政奉還の必要性を建白している（『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』No.一六六〇　一九八～一九九頁）ことから、必ずしも大政奉還に否定的な姿勢ではなかったことは看過できない点である。おそらく現実的に実現可能かどうかの考え方の違いが、帯刀と西郷の両者間には強くあったのではないかと推測される。
(12) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』No.一六八一　二二九頁～二三一頁
(13) 『維新日乗纂輯』三　日本史籍協会叢書　一九二六年　四八三頁
(14) 註（13）に同じ。
(15) 前掲 高村直助『小松帯刀』一八七頁
(16) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』No.一六七〇　二〇八頁～二一〇頁
(17) 前掲 高村直助『小松帯刀』一七六～一七七頁
(18) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料補遺　南部弥八郎報告書二』No.三九七三九頁～七四〇頁
(19) その代表例が、高橋裕文氏の論稿「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」（『大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書第一六冊　もうひとつの明治維新ー幕末史の再検討ー』　有志舎　二〇〇六年）である。高橋氏は、慶応三年の時期に薩摩藩が一貫して武力倒幕路線を貫いていたわけではなかったことを様々な史料を用いて論じている。
(20) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』No.一六七八　二二一頁～二二五頁
(21) 豊廣優貴「幕末期薩摩藩の軍事力強化と諸郷・郷士」（平成二八年度明治維新一五〇周年若手研究者育成事業　研究成果報告書　鹿児島県二〇一七年　四四頁～四五頁）
(22) 『鹿児島県史料　忠義公史料四』No.四三四　四二六頁掲載の「石室秘稿抄（当時ノ風信）」の中に、「京師ニテハ討幕論頻リニ起リ候由、如何可相成哉有志之嘆息ニテ候云々、」の記載がある。
(23) 末松謙澄『修訂防長回天史』下巻（柏書房　一九六七年）一一六一頁～一一六三頁
(24) 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局ー体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』（ミネルヴァ書房　二〇一一年）一九七頁
(25) 『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』No.一六八〇　二二七頁～二二九頁
(26) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局ー体調不良問題から見た薩長

同盟・征韓論政変』一九八頁

(27)『鹿児島県史料集（三〇）桂久武書翰』（鹿児島県立図書館　一九九〇年一一頁～一五頁）

(28)『大久保利通関係文書五』（立教大学日本史研究会　一九七一年　二一二頁～二一四頁）慶応三年八月十日付大久保利通宛本田親雄書状の中に、「折々之冗費不少外国云々之引続キ府庫全ク空虚非常之御預儲は勿論今日之御用途も日々と窮迫」との記載が見られ、藩財政がかなり逼迫している状況がわかる。

(29) 西郷にとって桂はもともと主家筋に当たったが、年齢が近く、同じ政治思想をもち、桂の次兄である赤山靱負が嘉永朋党事件（お由羅騒動）で憤死した際に共に深く関わったことなどから、互いに信頼し合える関係になっていったと思われる。

(30) 黎明館蔵「大久保利通関係資料」

(31) 代表的なものとしては、帯刀が慶喜から豚肉を度々催促されて困っている、と大久保に伝えている書状（大久保利通宛（推定）小松帯刀書状元治元年一一月二六日付　玉里島津家資料）などである。

(32) 黎明館蔵「大久保利通関係資料」

(33)『大久保利通日記　上巻』（侯爵大久保家蔵版　日本史籍協会一九二七年）四〇三頁

(34) 下関市立歴史博物館蔵

(35)『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』№一六九五　二七一～二七二頁

(36) 慶応二年四月に帯刀は、「海軍掛　集成館・開成所・他国修行等掛兼」を仰せ付けられた。以後、薩摩藩では帯刀を中心に、英国式海軍の整備に力を入れていくことになる。なお、同年五月には、これまでの月番家老が政務をすべて担当するシステムから、各家老が割り振られた事務を分担して担当する方式へと移行しており、これにより、家老の役割分担が明確化された。この内容については、家近良樹『西郷隆盛―人を相手にせず、天を相手にせよ―』（ミネルヴァ書房　二〇一七年）一九九頁を参考にした。

(37)『大久保利通日記　上巻』四〇五頁～四〇六頁

(38) 註（7）に同じ。

(39) 松平春嶽が、慶応三年十二月六日付で越前藩主の松平茂昭に宛てた書簡中に、「帯刀ハ公方様御反正無疑難有狩り、御輔け申上度心底之由分明ニ御座候」と記していることから、帯刀が慶喜を高く評価していることが客観的にも見られていたことがわかる。（伴五十嗣郎編『松平春嶽未公刊書簡集』思文閣出版　一九九一年　七六～七九頁）また、薩摩藩内でも慶応三年十一月付で、伊地知正治が大久保に宛てた書状の中で「於朝廷将軍辞職を御聞済ニ而徳川内大臣諸侯之上席ニ而被召置候様可有御座哉」（『大久保利通関係文書一』（立教大学日本史研究会　一九六五年六〇頁～六四頁））との記載が見られることからも、慶喜を新政府に受け入れようとする動きが他にもあったことがわかる。

(40) 前掲　家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』二〇九頁

(41)『鹿児島県史料　忠義公史料四』№五五五　五二一頁～五二二頁。帯刀は、慶応三年十一月十二日付の後藤宛書状で、「外国議事院之条モ、（中略）出京之節迄二細々取調、持参之心得二御座候、」と記しているように、今後の新政体の方針について、後藤と事前に協議する意図があったように思われる。

（42）『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』№一六九九　三四〇頁

（43）『鹿児島県史料集（二二）小松帯刀日記』（鹿児島県立図書館　一九八一年　一一〇頁）

（44）近年、関東での攪乱工作については、西郷らの指示ではなく、現地指導者の判断で行われたする見解が有力である。（前掲　家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』三一二頁～三一三頁）

（45）『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』№一七二一　三六九頁～三七〇頁。

（46）戦争の経緯については、大久保も（45）の書状と同一の日付で、在藩重役宛に詳細を伝えている。（『鹿児島県史料　玉里島津家史料五』№一七二〇　三六六頁～三六九頁）書状中には、「始終官軍之大勝利ト相成候段ハ、皇運弥挽回之端と可申候、是偏ニ薩長之粉骨砕身苦戦を成たる故也」との記載があり、政治的に追い詰められていた大久保が、度重なる戦勝によって安堵している様子が窺える。

（47）『鹿児島県史料集（二二）小松帯刀日記』　一〇八頁～一一一頁）

（48）帯刀は、外交の責任者として、堺事件やパークス襲撃事件などの難問題の処理に奔走し、明治元（一八六八）年九月には外国官副知事（玄蕃頭）に任じられている。玄蕃頭は、当時、大名クラスの人々に与えられる官名であることから、帯刀が新政府内において、いかに重要視されていたかがわかる。

（49）帯刀の動向を詳細に論じているのが、本稿でも度々、引用している高村直助氏の著書や、原口泉氏の著書である。また、近年は町田明広氏によって、様々な視点から、帯刀の動向が明らかにされつつある。

（50）近年は、前掲の高橋裕文氏の論文なども含めて、徐々に研究が進展しつつあるように見受けられる。

（いちむら　てつじ　本館学芸専門員）